

## 【C年】

### 大齋節第二主日

全能の神よ、わたしたちには自らを助ける力のないことをあなたは知っておられます。どうか外は体を損なうすべての災いを防ぎ、内は魂を襲う悪念を除いてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

司祭 「聖書のみ言葉を聞きましょう」

会衆は着席する。

### 旧約聖書

朗読者 「旧約聖書は創世記第十五章一節から」

1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。

わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

2 アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」<sup>3</sup> アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっていきます。」

4 見よ、主の言葉があつた。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

7 主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

8 アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

9 主は言われた。「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのものに持って来なさい。」

10 アブラムはそれらのものをみな持って来て、真つ二つに切り裂き、それぞれを互に向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。<sup>11</sup> 禿鷹がこれらの死体をねらつて降りて来ると、アブラムは追い払った。

12 日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。  
すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。  
17 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで。」

朗読者 「旧約聖書を終わります」

## 詩編

腰掛けたままで、一節ずつ交互に唱える。

## 第二十七編 十、十八節

10 主よ、わたしが呼ぶとき、わたしの声を聞き＝ わたしを憐れみ、こたえてください  
11 わたしの心は言う、「神の顔を求めよ」＝ 神よ、あなたの顔をわたしは慕い求めます  
12 わたしにみ顔を隠さず＝ 怒りで僕を退けないでください  
13 あなたはわたしの助け、わたしを救ってくださいる神＝ わたしを遠ざけず、見捨てないでください

14 父母がわたしを見放しても＝ 主はわたしを受け入れてくださる  
15 主よ、あなたの道を教え、平らな道筋に導いてください＝ わたしを陥れようとする者がいるのです  
16 わたしを手放して敵の意のままにさせないでください＝ 偽りの証人がわたしに立ち向かい、暴言を吐いてい  
17 わたしは堅く信じます＝ 神に生きる人々の中で、神の美しさを仰ぎ見ることを  
18 主を待ち望め＝ 心を強くして主を待ち望め

## 使徒書

朗読者 「使徒書はフィリピの信徒への手紙第三章十七節から」

17 兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18 何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。19 彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。20 しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主とし

て来<sup>こ</sup>られるのを、わたしたちは待<sup>まち</sup>っています。21 キリストは、万<sup>ばん</sup>物を支<sup>し</sup>配<sup>はい</sup>下<sup>か</sup>に置<sup>お</sup>くことさえてできる力<sup>ちから</sup>によって、わたしたちの卑<sup>いや</sup>しい体<sup>からだ</sup>を、御<sup>ご</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>ある体<sup>からだ</sup>と同<sup>おな</sup>じ形<sup>かたち</sup>に変<sup>か</sup>えてくださるのです。

1 だから、わたしが愛<sup>あい</sup>し、慕<sup>した</sup>っている兄<sup>きょう</sup>弟<sup>だい</sup>たち、わたし<sup>よつこ</sup>の喜<sup>よろこ</sup>びであり、冠<sup>かんむり</sup>である愛<sup>あい</sup>する人<sup>ひと</sup>たち、このように主<sup>しゅ</sup>によつてしつかりと立<sup>た</sup>ちなさい。

朗<sup>ろう</sup>読<sup>どく</sup>者<sup>者</sup> 「使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>書<sup>しょ</sup>を終<sup>お</sup>わります。」

一同立<sup>た</sup>つ。

ここで聖歌を歌う。

## 福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>書<sup>しょ</sup>

司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup> 「主<sup>しゅ</sup>は皆<sup>みな</sup>さんとともに」

会<sup>かい</sup>衆<sup>しゅう</sup> 「また、あなたとともに」

司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup> 「聖<sup>せい</sup>ルカによる福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>書<sup>しょ</sup>第<sup>だい</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>章<sup>しょう</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>節<sup>せつ</sup>以<sup>い</sup>下<sup>か</sup>に記<sup>しる</sup>さ

れた主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストの福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>。主<sup>しゅ</sup>に栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>」

会<sup>かい</sup>衆<sup>しゅう</sup> 「主<sup>しゅ</sup>に栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>がありますように」

31 ちやうどそのとき、フアリサイ派<sup>は</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>が何<sup>なん</sup>人<sup>にん</sup>か近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>つて来<sup>き</sup>て、イエスに言<sup>い</sup>った。「ここを立<sup>た</sup>ち去<sup>さ</sup>ってください。へ

ロデがあなたを殺<sup>ころ</sup>そうとしています。」32 イエスは言<sup>い</sup>われた。「行<sup>い</sup>つて、あ<sup>あ</sup>の狐<sup>きつね</sup>に、『今日<sup>きょう</sup>も明<sup>あ</sup>日<sup>にち</sup>も、悪<sup>あく</sup>霊<sup>れい</sup>を追<sup>お</sup>い出<sup>だ</sup>し、病<sup>びょう</sup>気<sup>き</sup>をいやし、三<sup>みつ</sup>日<sup>にち</sup>目<sup>め</sup>にすべてを終<sup>お</sup>える』とわたしが言<sup>い</sup>つたと伝<sup>つた</sup>えなさい。33 だが、わたしは今日<sup>きょう</sup>も明<sup>あ</sup>日<sup>にち</sup>も、その次<sup>つぎ</sup>の日<sup>ひ</sup>も自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の道<sup>みち</sup>を進<sup>すす</sup>まねばならない。預<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>がエルサレム以<sup>い</sup>外<sup>がい</sup>の所<sup>ところ</sup>で死<sup>し</sup>ぬことは、ありえないからだ。34 エルサレム、エルサレム、預<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>たちを殺<sup>ころ</sup>し、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>に遣<sup>つか</sup>わされた人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>を石<sup>いし</sup>で打<sup>う</sup>ち殺<sup>ころ</sup>す者<sup>もの</sup>よ、めん鳥<sup>どり</sup>が雛<sup>ひな</sup>を羽<sup>は</sup>の下<sup>した</sup>に集<sup>あつ</sup>めるように、わたしはお前<sup>まえ</sup>の子<sup>こ</sup>らを何<sup>なん</sup>度<sup>ど</sup>集<sup>あつ</sup>めようとしたことか。だが、お前<sup>まえ</sup>たちは応<sup>おう</sup>じようとしなかつた。35 見<sup>み</sup>よ、お前<sup>まえ</sup>たちの家<sup>いえ</sup>は見<sup>み</sup>捨<sup>す</sup>てられる。言<sup>い</sup>つておくが、お前<sup>まえ</sup>たちは、『主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>によつて来<sup>こ</sup>られる方<sup>かた</sup>に、祝<sup>しゅく</sup>福<sup>ふく</sup>があるように』と言<sup>い</sup>う時<sup>とき</sup>が来<sup>く</sup>るまで、決<sup>けつ</sup>してわたしを見るこ

とがない。」

司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup> 「主<sup>しゅ</sup>に感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>」  
会<sup>かい</sup>衆<sup>しゅう</sup> 「主<sup>しゅ</sup>に感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>します」